
なごたん ~ 和水探偵事務所 ~

raril

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なごたん〜和水探偵事務所〜

【Nコード】

N3728T

【作者名】

r a r i l

【あらすじ】

なごみ
和水探偵事務所。

県内のアパート、二〇二号室にあるのは、中退したばかりの大学生、「和水」が設立した探偵事務所だ。

和水は助手のやくみとともに、「素人探偵」として事件を解決していく。

素人探偵 part 1

「依頼がこない……」

まだ生活臭のしないワンルールの部屋が、象のマークがついた段ボールに埋もれている。

木製の壁は所々が補強されていて古めかしさを放ち、玄関脇に設えているキッチンも気分が滅入りそうなほどに汚い。

その雑然とした空間に似つかわしくない、小綺麗なガラスのテーブル。

そこに座る男性……なみ和水 しのすけ志之輔は、朝から全く手入れをしていないボサボサの頭を抱えながら唸っていた。

「何故……探偵事務所も立ち上げたのに……」

和水はじろりと玄関先を見た。ドア横に画鋲で留められている質素なA4用紙には、かわいらしい文字で《和水探偵事務所へようこそ》などとあり、和水を頼って来訪した依頼者の気が抜けること間違いない。

硬派な探偵を夢見る和水としては、そんなイメージだだ崩れの張り紙で客人を迎えたくはなかったのだが、ここに引越した際、張り紙の「立案者」にジャンケンで敗北を喫してしまったため文句を言うに言えない。

「……」

簡素な窓から、ジリジリというセミの鳴き声が聞こえる。首筋から

の汗がYシャツに流れ落ちてシミを作った。

（うちわ……ないのか……）

困惑が炎天下によりイライラへと変わりかけた和水の前、キッチン付近で山積みになっている段ボールがぐらぐらと揺れた。

「あわ……あわわわっ」

少年のように快活な声。和水がいやな予感を感じていると、床の振動とともに段ボールの山がこちらに崩れてきた。中身を確認したばかりだったので中の生活雑貨がいとも簡単に空中に投げ出され、そのうちの歯ブラシとリモコンがテーブルに飛来してきた。

「おっと」

和水は足を引っ張って着地点をガラス部分から畳に変えた。ホツと息をつく。せっかくの新品に傷がついたらたまったものではない。

と、ゴミのような生活必需品の山の中からうめき声が聞こえた。頭をさすりつつ段ボールを突き破ったのは、カエルがプリントされたTシャツを着る、少年。

とても人懐っこい顔。瞳は絵画のような純朴の輝きに満ち、体型は小学生辺りと誤解しそうなぐらいに小柄だ。

「キミ……そのドジなところいい加減直したらどうかね？」

まるで時代錯誤の教職者のような偉ぶった口調の和水に、のんきな

声が返ってきた。

「それは直しようがないですよー、先輩」

そう言つて、頭に乗った何かのコードを取り除く。

……《織識^{おりしき} やくみ》。和水の大学時代の後輩だ。顔の造形がとてつもなく女性に近いのでしばしば性別を間違えられるが、やくみはれっきとした男である。

やくみは段ボールから抜け出すと、短パンの埃をはたいた。

「それに先輩こそ、その変な口調直さないとお客さんがドン引きしちゃうかもですよ？」

突然自分自身も気になっていることを訊かれたので、和水は動揺してしまった。

「な、何を言うのかねっ。探偵らしくて良いだろう」

今はうだるような暑さが続く2010年の夏で、決して大正時代というわけではない。にも関わらず和水が外国の小説に出てくる識者のような口調を使うのは、ただ単に物語等に出てくる探偵役のキャラにその口調が多いからで、要するにそんな人間に憧れているだけである。

「大学にいたときもそんなこと言つて強がってましたよね」

首をかしげながら言う。やくみから悪気は全く感じられなかった。

「うつ……、うるさいっ。ほっといってくれっ」

和水はふてくされたように顔を背けた。^{そむ}

和水が学生時代にどんな生活を送ってきたかは、想像に難くなかつた。^{かた}

思ったことをそのまま言うやくみの気質^{きしつ}を知っているからこそ、「強がっているように見られていた」というのは和水の言葉に結構突き刺さることになった。

少しシュンとした和水を見て、やっと言い過ぎたことに気付いたやくみは、和水の横に回ると突然ガバツと抱きついた。

「んにゅ〜、自分はそんな先輩が好きですよ〜」

頬をぐりぐりすりつけてくる。体温が共有されて暑さが増すが、和水の顔は逆に青ざめた。

「のおお〜う！ 抱きつくんじゃない！ やめたまえ！ 私にそちの気^けはないい！！」

和水は鳥肌を立てながらやくみを全力で引きはがす。しかし華奢な身体を生かして全身で抱きついてくるのでなかなか難しかった。

やっとのことでやくみと離れると、やくみは不思議そうな顔をして、

「何ですか、ただのスキンシップじゃないですか、どうしてそんなに拒否するんです？」

「抱きつくのがスキンシップな訳あるかね！？ 親子じゃあるまいし、もっと何か別の方法があるだろう！ 紛らわしいんだよ！」

やくみは時々スキンシップと称して和水に抱きついてきたり、甘えてきたりとまるで恋人まがいのことをする。無論やくみは確信犯などではなく、本気でスキンシップだと思っていて、そこがまた和水の頭を悩ませるところでもある。

「私は異性愛者なのだっ。そういういけない道への橋渡しをするのはやめてくれ」

「自分も異性愛者ですよ。何を言ってるんですか、だからスキンシップと……」

やくみのとぼけたような声を聞いているとまるで気にする自分の方が悪く見えてくるので、和水は言葉を途中で遮った。

「ええい！ もういい！ キミはさっさとこの荷物を降ろさないか！」

和水はテーブルの向こうを指さした。

キッチン付近のみならずそこかしこにある段ボールは、まだ引っ越ししたてのせいでほとんど片付いていない。

「自分一人に任せるなんてひどいですよ、先輩も手伝ってくださいよぉ」

「私の荷はこのガラステーブルだけだ。他は全部キミなんだからキミが自分でやるんだ」

「ええ」……」

「ええ、じゃないよ！ ええ、じゃ！ キミがそんなんだからせっかく探偵事務所を開いたのに依頼者が来ないんだ！」

「引っ越して三日で依頼が来るほどみんな探偵を欲してませんよ……」

和水がビシツと指を差し、やくみがツツコミを入れた直後、玄関から「ビー」という無機質な電子音が鳴った。

途端、和水が目を光らせ、反射的に立ち上がった。

「ほ、ほらきた！　きっと我が和水探偵事務所の名を聞きつけてやってきた迷える子羊……いや依頼者だぞ」

和水が自慢げな目線を寄越すと、やくみは怪訝けげんそうな顔をした。

和水は嬉々として玄関まで飛んでいく。ドアを開く前に一旦停止し、Yシャツの襟えりを整えた。

そこで痺しびれを切らしたようにもう一度電子音が鳴った。

「はいはい、っと」

営業用の紳士的スマイルを顔に貼り付けて、錆さびついたドアをギギギ……と開く。

しかし廊下に立っていたのは見知らぬ来訪者でなく、和水のよく知る人物だった。

「あ、和水さん？」

半袖のタートルネックが瑞々しい優麗な顔立ちの女性。すらりと伸びた長身は彫刻のような造形美を持ち、腰まで届く黒髪は一つ一つが細やかで、気品に溢れている。

「な……、あ……」

その女性を認めると、和水の顔が赤らんだ。

「今、どすん！ って音がしたんで、何かあったのかなって心配になっただんですけど……」

線の細い柔らかな声を発し、女性は和水の顔をのぞき込んだ。

和水の目に映る、その扇情的なまでの色香に満ちた女性の瞳。清純な黒髪くろかみの良い匂いが鼻腔を通して脳髓を刺激し、和水はすでにノックアウト寸前だった。

訝しげな顔の彼女に和水が喉をからしていると、

「ああゝ！ おとなりの科香しなかさんじゃないですかあ！」

和水の脇からひょっこり顔を出すやくみ。

科香と呼ばれた女性は「あ、やくみちゃん」と顔をほころばせる。

「大丈夫だったの？ 外出たときに凄い音がしたから飛んで来たんだけど」

そのゆるみのない服装は明らかに出勤前と分かった。どうやら足を止めてしまったらしい。

「音……？ ……あゝ、あれですか。全然平気ですよ。段ボールにつまずいただけなんで」

「そう。なら良かった」

言って、科香はホッと息をついた。

科香は和水越しに部屋を覗いて、引つ越しの進捗状況を確認した。

「ああ、あまり進んでないね。手伝おうか？ 大変そうだし」

「いえ、お構いなく。科香さんは安心してご出勤してください」

「ふふ、ありがと。遅れちゃいけないからそろそろいつてくるね」
「いつてらっしゃいませ！」

科香とやくみが旧知の仲のように明るい笑みを交わし合い、ゆつくりとドアが閉められた。やくみが感心したように腕を組んだ。

「相変わらずお綺麗な方だなあ。真面目だし……」

つい最近会ったばかりの隣人を心配して駆けつけるというのは、なかなかできることではない。

「科香さんがおとなりで良かったですね！ 先輩」

やくみが和水を仰ぐと、和水の目はどこか遠くを見つめていた。

「あ、な、和水先輩……？ おーい」

背伸びして顔の前まで持つていった手をぶんぶんと振ると、和水はハッと正気を取り戻した。

「ししし科香さん！？ いやあの突然いらっしゃってどうなされたのですか！？」

「先輩、科香さんはもう行っちゃいましたよ……」

やくみの疲れたような呟きで和水はハッと現実に立ち返る。誰もいないことを確認すると、

「はああ……」

無念そうに肩を落とした。

「また科香さんとともに喋れなかった……」

「ていうか口も開いてなかったじゃないですか。これじゃあ告白もできないですよ、先輩」

和水は飛び上がった。そして再び顔を真っ赤にして反論する。

「こ、ここ告白だと?! ふざけたことを抜かすんじゃない! 私は別に彼女のことを好きな訳じゃないんだ!」

「あはは……、あ、そうでしたっけ……」

やくみは思い出したように相づちを打った。

「にしてもホント、独身しておくにはもったいない女性ですねえ」

やくみが悩ましい表情をすると、和水は激しく頷きを返した。

「そ、そうだそうだその通りだ。彼女の美しさは森羅万象ことごとくを上回る! あのミロのヴィーナスを見ているかのような純潔な雰囲気! 繊細な黒髪は森の奥深くに細々と流れる清流のように透き通り、それでいてあの吸い付くような白い肌には冷たさなど全くなく、まるで今生まれたかのような血色の良さがある!」

また始まったというように呆れた顔のやくみを無視して、和水は両手を大きく広げた。

「あれを芸術品と呼ばずしてなんと呼ぼう! 是非我が探偵事務所のマスコットガールに起用するべきだ!」

「とりあえず近所迷惑だから少し抑えて……」というやくみの声は和風に耳に全く届かず、全てを言い終えたらしい和子は「そ、そしてゆくゆくは私の……」などとよく分からないことをブツブツと呟いていた。

やくみは嘆息たんそくした。

「ハア……、もー。先輩も探偵目指すならもうちょっと落ち着いてくださいよう。これじゃ大学を辞めてまでついてきた自分がバカみたいじゃないですかあ」

頬をぷくりと膨らませるやくみに、和子は少し過剰かじょうに反応した。

「な、私は常に落ちついている！ 落ち着き払っている！ ていうか大学を辞めてまでって言ったが、キミが勝手についてきただけだろっ！」

と、すでに落ち着いていない声音で言う。

「ああ、ひどいな！ 先輩！ せっかくのワトソン役を」

やくみが指を差した瞬間だった。

「きゃああああ……！！」

突然に部屋に響いたこもり気味の悲鳴が、やくみの言葉をかき消した。

「！？」

直後、部屋にはセミの合唱という名の無言時間が流れる。

和水とやくみは一瞬聞き違いか何かかと思ったが、お互いにその悲鳴の主の姿が脳裏に浮かび上がると、二人は顔を見合わせてその女性の名前を確認し合った。

「科香さん……？」

素人探偵 part 1 (後書き)

初めての投稿。ミステリーですが謎の先にはあまり大したもの待ってなかったり。

掛け合いが面白いんだよ。掛け合いが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3728t/>

なごたん～和水探偵事務所～

2011年10月9日03時36分発行